

地方と都市のバスケット語母語話者の言語使用*

乾 秀行

(山口大学)

inui@yamaguchi-u.ac.jp

0 はじめに

本研究の目的は、エチオピア連邦民主共和国内の北オモ系少数言語である、バスケット (Basketo) 語母語話者の言語使用の実態について、本来の居住地に住むバスケット人と何らかの事情で都市部に移り住んだバスケット人を対象に社会言語学的調査を実施し、両データを比較することで将来のエチオピアにおける少数言語の保持の可能性および言語交替について明らかにすることである。

1 先行研究

一般にオモ系言語の研究はあまり進んでいないのが実情で、少数言語の言語データもあまり公刊されていない。本研究で対象にしたバスケット語に関しても筆者がここ数年研究発表している以外は、信頼のおける言語データが皆無と言ってよい¹。

同様に、社会言語学的調査についても、1993年に夏期言語研究所 (Summer Institute of Linguistics, 以下 SIL) とアジス・アベバ大学エチオピア学研究所 (Institute of Ethiopian Studies, 以下 IES) が共同で行った調査がいくつか SIL のホームページ上に PDF 形式で公開されているが、その中にはバスケット語に関する社

*本研究のデータは、2002年11月10日にエチオピア連邦民主共和国内のガンモゴファ州都アルバミンチに住んでいるバスケット語母語話者10名、2005年3月11日に同じくマスケト近郊のバルタ村に住んでいる25名を対象に、言語使用に関して聞き取り調査したものである。なお本稿は平成13年～16年度科学研究費基盤研究(B)(1)「多言語国家エチオピアにおける少数言語の記述、ならびに言語接触に関する調査研究：代表柘植洋一(金沢大学)」(課題番号13571039)および平成16～18年度科学研究費基盤研究(B)「オモ・クシ系少数言語の調査研究及び地理情報システムを用いたデータベース構築：代表乾秀行(山口大学)」(課題番号16401008)による研究の成果の一部である。なお、この研究は同タイトルで前年度申請により平成19～22年度に延長された(課題番号19401023)。

¹乾(2002, 2005, 2006a, 2006b)参照。

会言語学的調査は見当たらない²。したがって本研究で行った都市部に移り住んだ少数民族話者がどのような言語選択をするのかという観点からの比較調査はなく、その意味では、ここで論じる社会言語学的研究は、将来のエチオピアの少数言語の保持に関して新たなデータを提供することになるだろう。

ところで少数言語が近い将来消滅するかどうかに関しては、アフリカ大陸の場合、他の大陸とは少し事情が異なるように思われる。本研究の対象であるバスケット人の話者人口に関して、古くは Bender (1976) に約9千人と記されている。しかし最新の Ethnologue には1998年の人口調査として約5万8千人の母語話者がいると記載されている。つまり、乾 (2004) でもすでに指摘しているが、アフリカ大陸（あるいはエチオピア）の場合、少数言語話者を含めて人口が爆発的に増加しているため、南北アメリカ大陸やオーストラリア大陸とはかなり事情が異っている。したがって数字的にも状況的にも Krauss (1992) の悲観的な予測どおりにはならないように思われる³。実際前述したいくつかの SIL および IES の社会言語学的調査結果においてもエチオピアの少数言語が近い将来消滅する可能性を否定する見解が示されている。おそらく比較的単純な聞き取り調査をした限りでは、エチオピアのどの少数言語を対象にしても同じような結論が導き出される可能性が高いであろう。しかし人口面からの少数言語の言語保持という結論とは別に、内部的には公用語であるアムハラ語などとの二言語併用、あるいは言語交替を余儀なくされる人びともいる。本研究では都市部に移り住んだ人びとの言語選択に焦点を当ててこの問題を論じてみたい。

2 調査方法

2.1 調査場所および年月日

バスケット語の居住地での調査は、首都アジス・アベバから南西に約500キロ離れたバスケット語居住地域の中心地ラスカ (Laska) からさらに車で40分（現地の人の足で歩いて3時間）のところにあるバルタ (Balt'a) 村の広場で実施した。ここは筆者のバスケット語のインフォーマントである Fiqre Dejene 氏の出身村である。一方、都市部の調査はこちらもアジス・アベバから約500キロ離れたところに位置する、ガンモゴファ州の州都アルバミンチで実施した。アルバミンチはふだん Fiqre Dejene 氏が生計を立てているところで、彼の知り合いのバスケット人の家庭を訪問して実施した。調査日時はそれぞれ以下の通りである。

²Brenzinger (1999) を始め、38編の論文が公開されている。それらのタイトルの大半には「社会言語学的 (Sociolinguistic)」という文字が含まれているけれども、実際には簡単な語彙調査や文法記述だけのものであったり、体系だった調査ではなくインフォーマントへの簡単な質問だけで終わっているものも多い。

³Brenzinger (2001) および Kaji (2000) でもすでに同様の指摘がされている。

2005年3月11日：13時～16時（バルタにて）

2002年11月10日：14時～16時（アルバミンチにて）

2.2 調査対象者

バルタ村では、広場に集まったバスケット語を母語とするバスケット人計25人に調査を行った。一方、アルバミンチでは、シケラ地区に住む数軒のバスケット語母語話者の家庭を直接訪問し、計10人に調査を行った。

2.3 聞き取り方法

一人ずつ面談方式で行った。あらかじめ用意していた質問項目⁴に従って順序よく質問し⁵、回答を得た。なお、質問および回答の正確さを保つため、バルタ村では筆者のインフォーマントでもある Fiqre Dejene 氏が、またアルバミンチでの調査では Fiqre 氏と今は亡き Tamiru Shankoru 氏⁶が、バスケット語およびアムハラ語で正確に質問した。

3 調査結果

各項目について、バルタ村、アルバミンチの順に紹介し、同時に考察を加えていく。

3.1 年齢&男女比

バルタ村25人の「年齢&男女比」は表1のとおりである。年齢層、男女比率もできるだけ均衡になるように人選してもらった⁷。一方、アルバミンチ10人の「年齢&男女比」は表2のとおりである。筆者のインフォーマントの知り合いに調査したため、比較的インフォーマントと年齢の近い若い世代になった。しかし逆にここ10年ぐらいの間に結婚して家庭を持った人が多く、子どもの言語選択を考える上でまたとないデータを得ることができた。

⁴エチオピアの他の少数言語との比較しやすいように、SILの調査で行われた質問項目に合わせる。

⁵調査の謝礼として、現地の生活水準を鑑み、回答者に必要十分な謝金（あるいは回答者の希望に応じて、地方では入手困難な石鹸などの実用品）を渡した。

⁶筆者のエチオピアでの初期の調査で知り合ったジャーナリストで、2002年の調査の際同行してもらった。2003年病気のため急逝した。ここに改めてご冥福をお祈りする。

⁷エチオピアの女性（特に高齢）の場合、学術調査であると説明しても正確な年齢を答えてくれる可能性は極めて低い。したがって女性の年齢に関しては、実際の年齢よりも若干低くなっていると思われる。

表 1: 年齢&男女比 (Balt'a)

年齢	男性	割合	女性	割合	合計	割合
-30	6	24%	7	28%	13	52%
31-45	1	4%	4	16%	5	20%
46-60	2	8%	3	12%	5	20%
61-	2	8%	0	0%	2	8%
合計	11	44%	14	56%	25	100%

表 2: 年齢&男女比 (Arba Minch)

年齢	男性	割合	女性	割合	合計	割合
-30	3	30%	1	10%	4	40%
31-45	5	50%	1	10%	6	60%
46-60	0	0%	0	0%	0	0%
61-	0	0%	0	0%	0	0%
合計	8	80%	2	20%	10	100%

3.2 教育レベル

回答者の教育レベルに関して、バルタ村 25 人およびアルバミンチ 10 人を表 3 に示した。結果を見ると、全体のほぼ 5 割が無教育、4 割が初等教育、1 割が高等教育となり、バルタ村とアルバミンチの両方でほとんど差がなかった。教育レベルの差が居住地の移動とは全く関係ないことが窺える。なお無教育というのは、比較的高齢の人か、女性に圧倒的に多い。この傾向はガンジュレ語の場合と同じ⁸で、エチオピアの年配の女性の教育レベルは、概して低いといえる。

表 3: 教育レベル (Balt'a : 左/Arba Minch : 右)

最終学歴	人数	割合	最終学歴	人数	割合
無教育	12	48%	無教育	5	50%
初等学校	11	44%	初等学校	4	40%
高等学校	2	8%	高等学校	1	10%
合計	25	100%	合計	10	100%

⁸乾 (2004) 参照。

3.3 母語

バルタ村およびアルバミンチの「回答者の母語」を表4に、また回答者の「両親の母語」を、表5にそれぞれ示した。回答者の母語は全員バスケット語である。また回答者の両親の母語は、バルタ村の父親1名(アムハラ語)、母親1名(マロ語)を除いて、すべてバスケット語であった。このように、バスケット語母語話者の民族としての純血度は極めて高い。SILによるその他のエチオピアの少数言語の社会言語学的調査結果からも、この傾向はエチオピアの少数言語全体に共通している特徴である。多言語国家で少数言語が共存していても、本来の居住地に住み続ける限りにおいて、配偶者として選ばれるのは同民族であることがほとんどである。これまでは少数民族が互いに長く存続し、民族としてのアイデンティティがしっかりと守られてきた。

表 4: 回答者の母語 (Balt'a : 左/Arba Minch : 右)

言語名	人数	割合	言語名	人数	割合
Basketo	25	100%	Basketo	10	100%
合計	25	100%	合計	10	100%

表 5: 両親の母語 (Balt'a : 左/Arba Minch : 右)

言語名	父	割合	母	割合	言語名	父	割合	母	割合
Basketo	24	96%	24	96%	Basketo	10	100%	10	100%
Amharic	1	4%	0	0%	合計	10	100%	10	100%
Malo	0	0%	1	4%					
合計	25	100%	25	100%					

3.4 配偶者の選択および子供の第一言語

バルタ村およびアルバミンチの「配偶者の第一言語」の結果を表6に、「子供の第一言語」の結果を表7に示した。

まず「配偶者の第一言語」に関して注目すべきは、バルタ村では既婚者23名のうち22名までがバスケット語母語話者を選んでいるのに対して、アルバミンチに移り住んだ既婚者の5割以上が他の民族出身者を配偶者を選んでいる点である。少数民族話者にとって生まれ育った土地を離れることは、同時に自分たちのアイデンティティの証しである民族の純潔性を捨てることを意味する。ただし、配偶者の母語はガンモ語2名、ゴファ語1名、マロ語1名となっていて、決して大言語話者ではない。要するに少数民族が大民族と統合するという形には

なっていない点が重要である。

表 6: 配偶者の第一言語 (Balt'a : 左/Arba Minch : 右)

言語名	人数	割合
Basketo	22	96%
Amharic	1	4%
合計	23	100%

言語名	人数	割合
Basketo	5	56%
Gamo	2	22%
Gofa	1	11%
Malo	1	11%
合計	9	100%

ところでさらに注目すべきことは、子供の第一言語である。バルタ村では子供のいる 22 人のうち 21 人 (91%) が、子供の第一言語として自分の母語であるバスケット語を選択させているのに対して、アルバミンチでは子供のいる 9 人のうち、5 人がアムハラ語あるいはアルバミンチの地域有力語であるガンモ語、残り 4 人がアムハラ語と答えた。つまり、自らの母語であるバスケット語を子供の第一言語として誰も選択させていないということである。この結果から、バスケット語母語話者は自らが生まれ育った土地を離れて生活を始めると、簡単に母語の保持ということもやめてしまうことがわかる。ここでは「子供の第一言語」として、回答者の全員がエチオピアの公用語であるアムハラ語を選択していることが特筆に値する。

表 7: 子供の第一言語 (Balt'a : 左/Arba Minch : 右)

言語名	人数	割合
Basketo	21	91%
Gofa	2	9%
合計	23	100%

言語名	人数	割合
Gamo/Amharic	5	56%
Amharic	4	44%
合計	9	100%

3.5 家庭内で使用する言語

次に家庭内での使用について考察する。バルタ村およびアルバミンチの「両親と話す時に使用する言語」の結果を表 8 に示した。また「両親がお互いに話す時に使用する言語」の結果を表 9 に示した。

まず「両親との会話」では、バルタ村の 1 名を除き⁹、若干の二言語併用があ

⁹この回答者の父親はアムハラ人であった。

るものの、バルタ村、アルバミンチともバスケット語が選ばれている。アルバミンチに移住したバスケット人にしても、両親はバスケット語居住地域に住み続けている、あるいは住んでいたわけであり、両者で差が出ないのはむしろ当然である。同様に、両親がお互いに何語で話すかに関しても、予想通りほぼバスケット語であった。

表 8: 両親と話す時に使用する言語 (Balt'a : 左/Arba Minch : 右)

言語名	父	割合	母	割合
Basketo	21	84%	25	100%
Basketo/Gofa	2	8%	0	0%
Basketo/Amharic	1	4%	0	0%
Amharic	1	4%	0	0%
合計	25	100%	25	100%

言語名	父	割合	母	割合
Basketo	10	100%	10	100%
合計	10	100%	10	100%

表 9: 両親が互いに話す時に使用する言語 (Balt'a : 左/Arba Minch : 右)

言語名	人数	割合
Basketo	24	96%
Basketo/Amharic	1	4%
合計	25	100%

言語名	人数	割合
Basketo	10	100%
合計	10	100%

次にバルタ村およびアルバミンチの「兄弟姉妹・配偶者と話す時に使用する言語」の結果を表 10、表 11 にそれぞれ示した。

まず「兄弟姉妹との会話」であるが、バルタ村およびアルバミンチとも、他の言語を用いる場合も若干あるけれども、全員がバスケット語を使用していることがわかる。要するに生まれ育った家庭内では、両親および兄弟姉妹とは母語であるバスケット語が選択されている。

一方、「配偶者との会話」に関しては、バルタ村とアルバミンチでは異なる結果が出た。バルタ村では若干名を除き、ほぼ全員バスケット語で会話をしているのに対して、アルバミンチではふだんバスケット語で会話しているのは 3 人 (33%) にとどまり、残りはアムハラ語、ガンモ語、ゴファ語といった別の言語で会話をしている。特にエチオピアの公用語であるアムハラ語を使用する人が 5 人 (56%) もいた。表 6 より配偶者は全員アムハラ語母語話者ではないので、アルバミンチで暮らす中、お互いの意思の疎通を図るための言語として公用語のアムハラ語が自然と選択された結果である。お互いの母語よりも場所が優先されたので

ある。アルバミンチの場合、このように結婚して新しい家庭を持つと、自分が今まで両親や兄弟姉妹と家庭内で行ってきた言語使用とは全く異なる環境を作り上げることになる。

表 10: 兄弟姉妹・配偶者と話す時に使用する言語 (Balt'a)

言語名	兄弟姉妹	割合	配偶者	割合
Basketo	21	84%	20	87%
Basketo/Amharic	2	8%	1	4%
Basketo/Gofa	1	4%	1	4%
Basketo/Gofa/Amharic	1	4%	0	0%
Amharic	0	0%	1	4%
合計	25	100%	23	100%

表 11: 兄弟姉妹・配偶者と話す時に使用する言語 (Arba Minch)

言語名	兄弟姉妹	割合	配偶者	割合
Basketo	9	90%	3	33%
Amharic/Gamo	1	10%	2	22%
Amharic	0	0%	2	22%
Gamo	0	0%	1	11%
Amharic/Gofa	0	0%	1	11%
合計	10	100%	9	100%

次にバルタ村およびアルバミンチの「子供と話す時に使用する言語」の結果を表12に示す。この結果を見ると、ここでもバルタ村とアルバミンチで大きく異なった。バルタ村の場合、子供との会話ではほとんどバスケット語で行われているのに対して、アルバミンチでは逆にアムハラ語がその役割を演じていて、バスケット語は全く使われていない。つまり、この状況に関して完全な言語交替が生じているといえる。驚くべきことは、配偶者として5割の人が同じバスケット人を選んでいるのに、つまり両親ともにバスケット人であるにもかかわらず、子どもの前では彼らは自らの母語であるバスケット語で話さないという事実である。

表 12: 子供と話す場合に使用する言語 (Balt'a : 左/Arba Minch : 右)

言語名	子供	割合
Basketo	20	87%
Basketo/Gofa	1	4%
Basketo/Amharic	1	4%
Gofa	1	4%
合計	23	100%

言語名	子供	割合
Amharic/Gamo	5	55%
Amharic	3	33%
Amharic/Gofa	1	11%
合計	9	100%

3.6 家庭外で使用する言語

今度は家庭外での言語使用について考察する。まずバルタ村およびアルバミンチの「友達と話す時に使用する言語」の結果を、表 13、表 14 にそれぞれ示した。

バルタ村の結果では、もちろん全員がバスケット語を使っているのであるが、アムハラ語やゴファ語を使うと答える人もいて、家庭外になると若干ヴァリエーションが豊かになっていることがわかる。友人との会話という非公式な場とはいえ、いくつかの言語を使い分けることで、会話を円滑に行っていることがわかる。一方、アルバミンチでは、1名（ガンモ語のみ）を除き、概ねアムハラ語を基本に会話をしていることがわかる。都市部では公用語アムハラ語の存在を無視しては会話が成り立たないことがわかる。

表 13: 友達と話す場合に使用する言語 (Balt'a)

言語名	人数	割合
Basketo	9	36%
Basketo/Amharic/Gofa	8	32%
Basketo/Gofa	4	16%
Basketo/Amharic	4	16%
合計	25	100%

次に町や村で使用する言語について考察する。バルタ村およびアルバミンチの「村で使用する言語」の結果を表 15 に示し、「町で使用する言語」の結果を表 16 に示した。

まず「村」の言語使用である。バルタ村では、全員バスケット語を使っており、また半数近い 11 名 (44%) がバスケット語のみと答えている。それに加えて、近隣有力語であるゴファ語や公用語であるアムハラ語が時に応じて使われている。

表 14: 友達と話す場合に使用する言語 (Arba Minch)

言語名	人数	割合
Amharic	4	40%
Amharic/Gamo	3	30%
Amharic/Basketo	1	10%
Amharic/Basketo/Gamo	1	10%
Gamo	1	10%
合計	10	100%

これは友達との会話とだいたい同じ結果である。家庭の外ではほぼこのような割合で言語選択がされていて、これが多言語社会での基本的な姿と思われる。一方、アルバミンチの方の結果は、「村」という質問の意味を自分が生まれ育った土地という意味で理解したためか、全員がバスケット語と回答してしまったので、ここでの考察を差し控えることにする。

次に「町」での言語使用を見る。バルタ村での調査結果は、今度はバスケット語のみという人が3人(12%)のみで激減し、代わって地域有力語のゴファ語や公用語であるアムハラ語のみを使う人もそれぞれ3人(12%)、2人(8%)と同じ割合で現れた。「村」での使用に比べて、ゴファ語やアムハラ語が使われる場面が格段に増えたことを示している。一方、アルバミンチでの調査結果は、町でバスケット語を使う場面が皆無になった。地域有力語であるガンモ語とアムハラ語が自然と選択されている。

表 15: 村で使用する言語 (Balt'a : 左/Arba Minch : 右)

言語名	人数	割合
Basketo	11	44%
Basketo/Gofa/Amharic	7	28%
Basketo/Gofa	4	16%
Basketo/Amharic	3	12%
合計	25	100%

言語名	人数	割合
Basketo	10	100%
合計	10	100%

3.7 公の場で使用する言語

最後に公の場でどのような言語を使用するかを考察する。まずバルタ村およびアルバミンチの「役場で使用する言語」の結果を表 17 に示し、「マーケットで使用する言語」の結果を表 18 に示した。

表 16: 町で使用使用する言語 (Balt'a : 左/Arba Minch : 右)

言語名	人数	割合
Basketo/Gofa/Amharic	7	28%
Basketo/Gofa	5	20%
Basketo/Amharic	5	20%
Basketo	3	12%
Gofa	3	12%
Amharic	2	8%
合計	25	100%

言語名	人数	割合
Amharic	6	60%
Amharic/Gamo	2	20%
Gamo	2	20%
合計	10	100%

まず「役場」での言語使用であるが、バルタ村ではバスケット語のみ使用する人が4人(16%)であるのに対して、地域有力語のゴファ語や公用語アムハラ語を使って母語であるバスケット語を全く使わない人は併せて16人(64%)と全体の約3分の2を占めている。このように地方に住んでいても地域社会の中で行政という公の場面では地域有力語や公用語での会話を余儀なくされることがわかる。将来的にもこの傾向はさらに強まることが予想され、純粋な意味での単一言語話者はいなくなるかもしれない。一方、アルバミンチの場合、アムハラ語か地域有力語のガンモ語のみで、出身地であるバスケット語が使える環境ではない。

表 17: 役所で使用する言語 (Balt'a : 左/Arba Minch : 右)

言語名	人数	割合
Gofa	7	28%
Gofa/Amharic	7	28%
Basketo	4	16%
Basketo/Gofa	4	16%
Amharic	2	8%
Basketo/Gofa/Amharic	1	4%
合計	25	100%

言語名	人数	割合
Amharic	8	80%
Amharic/Gamo	2	20%
合計	10	100%

最後に「マーケット」での言語使用であるが、バルタ村では全員がバスケット語を使っており、必要に応じてゴファ語やアムハラ語が使われている。生活に密着したマーケットでは母語はまだ健在である。一方アルバミンチでは、母語のバスケット語の使用は皆無で、アムハラ語とガンモ語のみである。ただし役所に比べてアムハラ語よりも地域有力語のガンモ語での使用が多いのが特徴的

である。

表 18: マーケットで使用する言語 (Balt'a : 左/Arba Minch : 右)

言語名	人数	割合
Basketo/Gofa/Amharic	9	36%
Basketo	8	32%
Basketo/Gofa	4	16%
Basketo/Amharic	4	16%
合計	25	100%

言語名	人数	割合
Amharic/Gamo	8	80%
Gamo	2	20%
合計	10	100%

4 まとめ

本研究ではバスケット語母語話者の言語使用の実態について、本来の居住地（バルタ村）に住み続けるバスケット人と都市部（アルバミンチ）に移り住んだバスケット人を対象に社会言語学的調査を実施した。

その結果、本来の居住地に住み続けるバスケット人に比べて都市部に移り住んだバスケット人は、たとえバスケット人同士で結婚したとしても、公共の場や家庭外だけでなく家庭内においてすら、自分たちの子どもの世代にバスケット語を継承させないことが明らかになった。エチオピアにおける少数言語の表面的な人口増加とは裏腹に、個人レベルでは言語交替が確実に進んでいることを意味する。つまり、話し手の数が激減している「絶滅に瀕した言語」だけでなく、少数言語はその政治的・経済的・社会的環境が激変すれば言語交替を引き起こし、一気に消滅する危機すら孕んでいるのである。

1991年の社会主義政権崩壊後しばらくは不安定な時期が続いたエチオピアは、21世紀になってからのここ数年、道路、携帯電話などのインフラ整備が急速に進んでおり、田舎といえども以前に比べて格段に情報が行き交う環境に変わりつつある。実際アジス・アベバからバスケット人の中心都市ラスカまでの道も年々良くなっており、また2007年には携帯電話が繋がるようになったそうである¹⁰。

次の表 19 はバルタ村の25人の多言語使用の実態である。それによると、バスケット語しか話せない人はわずか3人(12%)で、実に3分の2の人がアムハラ語が話せる。教育レベルの向上に伴い、バルタ村といえども今後一気にアムハラ語への言語交替が起こる可能性も否定できない。アルバミンチに移り住んだバスケット人の行動パターンはエチオピアの少数民族の言語の将来を暗示してい

¹⁰2007年9月にサウラからラスカまでサービスが開始されたが、約1ヶ月後にシステム障害のためサービスが停止し、2007年12月時点ではサービスは再開されていなかった。

るともいえる。人びとの母語へのこだわりは我々言語学者が感傷的に考える以上に希薄であるのかもしれない。

表 19: 多言語使用 (Balt'a)

言語名	人数	割合
Basketo/Gofa/Amharic	13	52%
Basketo/Gofa	6	24%
Basketo	3	12%
Basketo/Amharic	3	12%
合計	25	100%

【参考文献】

- Bender, M.L., J.D.Bowen, R.L.Cooper and C.A.Ferguson (eds.) (1976) *Language in Ethiopia*. London: Oxford University Press.
- Brenzinger, M. (1999) *The "islanders" of Lake Abaya and Lake Chamo: Harro, Ganjule, Gats'ame and Bayso. SIL Electronic Survey Reports 1999-003* (<http://www.sil.org/silesr/1999/003/brenzin5.pdf>) Summer Institute of Linguistics.
- Brenzinger, M. (2001) *Language Endangerment through Marginalization and Globalization*. Sakiyama,O.(ed.):91-116.
- 乾 秀行 (2002) 「バスケット語の語彙」『一般言語学論叢』4・5 合併号, 11-33.
- 乾 秀行 (2004) 「ガンジュレ人の言語使用」『一般言語学論叢』7, 73-93.
- 乾 秀行 (2005) 「バスケット語の文法概観」柘植洋一 (編)『多言語国家エチオピアにおける少数言語の記述, ならびに言語接触に関する調査研究 (Cushitic-Omotc Studies 2004)』1-40, 金沢大学.
- 乾 秀行 (2006a) 「バスケット語の態 (ヴォイス) について」橋本邦彦他 (編)『実験音声学と一般言語学』489-495, 東京堂.
- 乾 秀行 (2006b) 「バスケット語の文法概観 II」乾秀行 (編)『オモ・クシ系少数言語の調査研究および地理情報システムを用いたデータベース構築 (Cushitic-Omotc Studies 2006)』15-60, 山口大学.
- Kaji, S. (2001) Comments on "Language Endangerment through Marginalization and Globalization" by Matthias Brenzinger. *Language Endangerment through Marginalization and Globalization*. Sakiyama,O.,ed.:123-125.
- Krauss, M. (1992) 'The world's languages in crisis'. *Language* 68:4-10.
- Sakiyama, O.(ed.) (2001) *Endangered Languages of the Pacific Rim: Lectures on Endangered Languages:2 -From Kyoto Conference 2000-(ELPR Publicaion Series C002)* Nakanishi Printing CO.,Ltd.Kyoto.